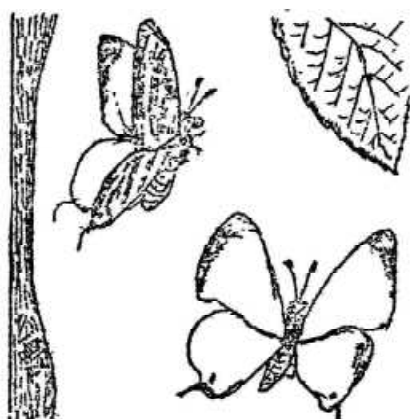


Vol. I, No. 12
1951年12月
倉敷昆虫同好会

Zephyrus (特にアカシジミ)

の訪花について 廣瀬義躬

訪花の習性を持つ蝶類の中でも特にZephyrus類は、訪花するものが少い。従来蝶類の訪花現象のなまなつた報告といえは、澤村太郎「蝶の生活」p.10~17 (1948)にのものと見られる。しかしこの中にもZephyrus類はミズイロオナガシジミとミドリシジミ、ウラギンシジミ等が主であるが、いずれも訪花習性は



1種又は2種をなぐるのみであつて他の種の訪花は見られない。

筆者はVI-3, 1951 諸君村黒田に於てアカシジミガヅメガイモ(蒙名)の花に訪花するのを観察した。これはZephyrusの訪花の一例であるが、幸い前記文献中にた本姓の訪花の記録はなく、又通称蒙名は枚数が観察した所では、訪花せぬと思われるジメガイモの花に本姓が訪した事は記録あることであつて命案を多く。

Zephyrus類の訪花習性が知られることを意味する。しかしこの命案訪花ということはおおなかなる花蜜の求むばいということである。今後これらの種の訪花観察例が多く出ることが望ましい。

た前記文献中にも出ていたが本姓とミドリシジミガク(緑白)の花に訪花することは枚数の観察するところでは、概知の事実と思われるがこの機会に報告しておく。(1951.11.1.)



岡山縣北部の昆虫雑感



西村公夫

私の経験からも岡山地方は可成り昆虫の宝庫である。岡山地方の昆虫に就いて私達が採って来た事をそのまゝにして居るのはいけないのでこのナマンスに岡山県岡部郡方に珍産地帯を掲載してみよう。



1. **郡山** 倉敷市から岡部に往く所、即ち郡山である。倉敷からはバスに乗って奥加部あたりの好地に行ける。鳥取県から登っても面白いもので、郡山駅下車して徒歩で頂上に登る。又黒尾峠、日本原も面白い。何と云っても天牛が多い。蝶では相当以前から研究されて居り、珍産地帯の名付くものでセセリナヨウマヅメノメナヨウがある。オーヒカゲ、オーミスダ、ヤマダラルリフバネ、ウスイロヒヨウモンモドキ、虫蜂には近人でスズタニルリシジミがある。郡山の頂上にはゼフィルス類やミヤマカラメアゲハが多く見受けられる。ブナ林からはフジミドリ、エゾゼミ、コエゾゼミが見られる。蝶で其の生息ものを挙げてみると前記の他に、エゾミドリ、ミドリ、ウラギン、ダイセン、コヤマダラセセリ、シータチハ、メスアカ、ホシカセバネ、ウスバシロ、ヒメヤマダラヒカゲなどがある。登山は可成りらくに登れ、頂上尾根の東側はほとんどが熊笹で、ミズナラ、ブナ、ヒヨドリバナがあり、西側及岡山側は伯耆大山頂上のような見事な荒れと高山植物に被われている。水直分布で云えば可成り奥加部は伯耆大山の頂上に等しい。南北に見はらしのよいのも一帯で北は大山、中門山脈、日本海、鳥取砂丘、南は四国、瀬戸内などが望める。西は尾山、東は沖ノ山にさえぎられて見えない。好期は5月中旬、6月下旬～8月中旬。

2. **郡山** 岡山県大の竹内高氏がよく行かれる所で又瑞本には私の親類の山がある。鳥取県側から倉敷市まで登山は絶えず私が通つた所である。竹内氏は其の先輩で鳥取市の原住人、数年前からずっと岡山県大に居られる。やはり此地で天牛がNo.1、中門一の旭川もあり岩魚釣りでも登山でも出来る。更に遊覧地兼採集地であつてヒヨウモンモドキの多産地、ヤマナヨウ、ウスバシロナヨウ、メスマハナカミキリなどの人気者を始め、ウラジロミドリ、ウスイロヒヨウモ

ンモドキ、アカセセリ、ヒメヒカゲ、キマダラルリツバメを産し、郡山といは
一寸異う、第一山が深い、其の多くは大車原とツナの大乗始林から成る。蝶や蛾
虫などの珍種?も多し。特に面白いと思つたのは、こんな山中にムラサキシジミ
を見出された事である

。ゼフィルスも居るが
多くはメスアカである

。鳥取県側では数ヶ所イヌ
ダボソヤマキと共にヤマキ
クサウス(※)を1947. IV. 14に捕
た事がある。この辺は両県
共にタイワンコシジミ、ウ
ラジロミドリ、アカセセリ
が産する。特に多いのは
老ギフクサウとウラジロミ
ドリで、ウラジロは関西以
西で各地の石に出る種は所
はない、食樹たるミズナラ
の葉がないためである。猪※

ほとんど飼われてないがごく般に大陸性昆虫の多い所で勿論、ウスノロヒヨウ
モンモドキが普通であることは云うまでもない、時期7月上旬～8月下旬。

以上三箇所、私の知る處を述べたに過ぎず又、他昆虫に就いても詳しくおから
ない、所後も続けて探索するが岡山の同好者こそは老つと深く研究される事が望
ましい。勝倉線の南端の日と私の録取の日が人れば自由に探してみたいと思う。
旅費だけでなく昆虫全般にかけても、……。最後にいつか協力下さる先輩諸君
に厚く御礼申し上げる次第である。

- 地 1. には 5万分の1 津山東部、磐頭、255万分の1奥の細道、日本橋、必登
図 2. " 大山、瑞本、勝山
3. " 上石見

(鳥取、西村公天 現在大阪に在住)

倉敷昆虫同好会

年刊機関誌

の名称

募集

先の例会で決
定した年刊の機
関誌の題名及名
前を皆衆から募
集します。今月
末の昆虫懇話会
までに考えてお
いて下さい。

※ 蝶や蛾と面白い

時期は4月下旬、7
月上旬。

3. 見立、上石見

当地は先賢岡田氏の
竹内氏が訪ねた所でク
ロツバメシジミの鳥取県
唯一の産地がある。其故
判つたもので足土(岡山
側)から上石見(鳥取県
)までの間にヒカゲ、セ
セリが主で例えばオーヒ
カゲの群産地、クロヒカ
ゲモドキ、キマダラモド
キを産する。他の昆虫は



本年分会費未納入者は至急お納め下さい





サツマシジミ 安芸 宮島には普通

1 50年8月26日、宮島包
ヶ浦に飛つた時、本種3匹を
発見、採集した。名を同地で
モンメアザハシと誤認した。

(総社西中2年 永野弘造)

冬のウラナミシジミ

2 5年2月9日 小雨のふる庭
を何んとなん眺めていた時、
庭の縁に何かぶらさがつてゆれている
蝶らしい物を見出し、手で捕がせて
捕獲した。これは *Lampides boeticus*
LINNE ウラナミシジミ(♀)であ
り、朝比したての様に新鮮であつた。
これは大谷が似て似るが、次に並列相
違を録げる。

① 図の①の白帯がはつきりしている。
(表面)

② 裏面の斑は、や、不
鮮明であつて色もや、あ
い。(大きさは同じ位であ
つた)。



ほも2月の記録は他に
もあつたように記憶する。古い記録で
あるが御参考までに。(標本筆者永野
) (左野長一)

シルヴァシジミ

総社町にも産す

1 951年10月16日 吉備郡総社
町根元附近(本種雄1匹を採
集した。相当古いものでつた。

(永野弘造)

倉敷産ガムシ 更に1種追加

先 本誌Vol.1, No.10,に倉敷産
ガムシ科日録を掲げておさ
めしたが、松尾次郎の蔵友寄贈種を収蓄し
ていたことに気が付いたので、おらた
めに追加しておきます。

11. *Mycalesis cashmirensis* RE-
DTEBACHER コガタガムシ

各地に普通

これは今迄知られているものですが
この外小型のものがある。これは
何れも見出されしと認められます。

(小野 洋)

ムヲサキツバタ
豪溪で発見

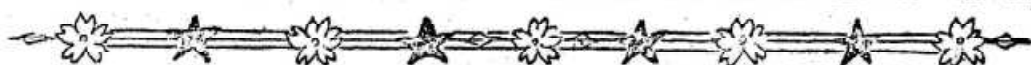


951年11月4日、薩摩に
行つた時、ある植物の葉にと
まつた水蛭を見た。標葉は出来たか
つた。
(永野弘造)

原稿募集!

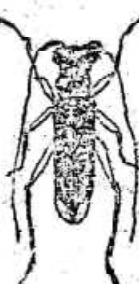
すずもい原稿募集します。大知能、麻婆記、暖房、ちてて、格で、小、中学生の方と、し、御性、物、ニ、

入切は毎月5日☆



大山カミタリの新産地？

今夏の夏、伯耆大山に於て植物採集を行つた際、偶然にも昆虫採集の渓谷先生
一好と同居し共にそれぞれの目的
採集の最も合理的な方法の一つと
昆虫より見付け易い植物をさがす
それには植物についての知識を必
ずないからその際には専門の植物
によつた事はうれしい。つまり前
の頃度として、ハイノミ科サワフタズが知られてゐるが、大山にはサワフタズの
類が数種あり、そのいづれをの葉が大山カミタリによるあの特徴ある食こんを残
して置り、大山特有のサワフタズなら面白いと思つてみたが落胆した。不だ範
同を葉は残つては居るが！



前を探索した。其の時先生は昆虫
して、昆虫の食性を知り、小と大
方が近直である事を認識された。
要とするわけだが、幸い昆虫を知
の知識が多少なりとも先生のお復
習が長くなつたが大い三交。

サワフタヤの分布による大山カミサリの分布を予測する事は未だ自信がないので、ここではただ大山カミサリが棲む食虫のあつたサワフタヤ標本の産地を報告して顔足の分類をしよう。

その一は、葉作と國幅在籍の物見峠。

その二は、県下豫高で美術描寫にまたがる俊山。

以上二ヶ所ではあるが現在まで私の知つて居る火山が三ヶりの麓地と共に老成すると縣下北端を走る背稜山麓には広く分布するのではなからうか。

〔古屋野電〕



- | | |
|------|-------------------------|
| ▲ 日時 | 昭和二十七年四月中旬 (発表時間一人約10分) |
| ▲ 申込 | 昭和二十七年三月十五日 (発表要旨二十部提出) |
| ▲ 資格 | 小、中学校、高等学校の生徒に限る |

倉敷市大原農業研究所外
主催 岡山博物同好会
会長 佐藤清明

第四回 生徒博物コンクール

- | | |
|------|---------------------|
| ▲ 内容 | 動物、植物、地層に関する獨創的研究 |
| ▲ 審査 | 岡山博物同好会の顧問十餘博士に依頼す |
| ▲ 賞金 | 一万圓、最高点に大原賞を贈る 副賞多し |

(詳細を照會)

倉敷附近の昆虫採集地開拓

古屋野 寛

倉敷附近は植物相の点に平凡な所だが、珍昆虫が幾多と報告されているが、これは諸君の努力の賜物であつて、何ら昆虫相に恵まれたと言う事にはならない。昔、カエると貧弱な昆虫を諸君は熱心のおまじらみで種々その数を減少させてゐるのである。今までの珍昆虫の記録は遂には歴史的存続とせざるを得ない勢いである。黒田はどうだろうか、新聞に大々的に報道され、その名は無意味な小紙新聞等が押し付けている。更に盛心の到りだ、その結果は未半諸君等の採集品の量が証明するだろう。私は昆虫の事には暗い然し植物分布と昆虫の關係は、重大な意味を持つてゐる事を知つてゐる。何も黒田に珍しい植物が生育してゐるだけでは万人、唯黒田がオアシスの様相であるからだ。黒田に匹敵する植物相の地帯は倉敷や岡山にはいくらもある。黒田より更に面白い植物相の場所を幾ヶ所知つて居る。又、阿曾とそっくりの所もあるのだ。一々その地帯を踏んで発表出来ないのであるが、今度の発表会で細天地を開拓しようではないか。平凡と思つても

一たびくべさば、市街地の真中でモクモク居た事もあるのだ。

ホシミスジとコミスジのことなど



青野孝昭

本誌6月号にホシミスジとコミスジと題して短文を書いたところ、早速熱心な皆さんから或会合の席上繰り上げられてしまった。全く有難き次第で大変嬉しく思っている。あの儘放つて置るのは良心が参めるので、こゝに恨んで謝意を訂正しようと思う。

6月号には唯、採集の便害を思つて要するにホシミスジは市街地、農村等に居て、コミスジは市街地周辺の山地に居り、前者を採りたいのなら市街地、農村に、後者なら山地に足を運ばば良い所を述べたつもりだった。ところがつい、いゝ気になつてホシミスジは山地には全く居なくて市街地、農村にのみ居り、コミスジは逆のことが言えるといつたようなことを書いた。この所も皆さんから指摘されをわけて、私もこの誤は

中国昆虫學會発足!

今度、中国地方に於いて昆虫研究機關を活躍する爲に中国昆虫學會が誕生した。すでに第壹大に刊行された通報No.1が10月に発行され、その活動は活発化している。事務局設営などは未定であるが中央の鳥取岡山あたりにおく予定。当地方の東限は丹波、近江界まで。本誌"Entomologic Investigation"は第34回発行の予定で其後に創刊がなす予定である。本誌が本誌で本誌に東限頒布し、通報は中国地方の研究者である限り希望により一冊無料にて送付する。これは本誌の予定は、本國地方の昆虫研究機關一冊、その關係大限一冊、中国地方に於ける昆虫分布研究、右昆虫のミドリソジミ族(右限は鳥取県、おひさババフレット一冊、鳥取県産蝶類図(鳥取県同好会一冊)、中国産カズバ科の女昆虫に依る分類(西村公夫)等が有力である。この他地よニース、採集報告、通報が40~50ページのものである。本學會に就いて詳細を知りたい方は下記へ通信料をそえて申し込まれた。本學會では現在奈良、京都、大津、東京等である。

【大阪市東区西脇町8 西村公夫氏】

第四回虫供養 第三十九回

岡山博物同好会創会行わる
(次頁へ)

自分の罪深さを思い深くお他がします。

鳥獣といったような比較的狭い地域で、比較的活動範囲の広い鳥の分布を上げ云々することは、僻台をなくとつた分布図上では大して意義のないことかも知れぬ。ところが餘りが實際床でも疎雑に行こうとすれば、少しでも深山奥の場所を組って出掛けるのが当然で、こういう荒僻では狭い地域における分布様相を知つて置くことは大いに有益であつて、全く予備知識のない土地を突然に歩みよりは牧草がやいのガー娘だらう。そこで少しでも益病になり得る人があればと思つても月号に前記のようなことを述べたのであるが前述の事実は絶滅的なものでなくて、比較的のこととホシミスジは比較的南部地、渡河に多く、フミスジは山地に比較的多いのであることをここに明記して置く次第です。

岡山博物同好会主催の鳥獣展は去る12月21日、倉敷市東町の観音寺で鳥獣代表、皆佳力が20種鳥が集り盛大に行われた。

この夜大原農業研究所で午後一時から、かきしりの岡山博物同好会の館に開かれ、次の通りの花鳥、蘭展があつた後鳥獣展を観覧した。

従来 岡山国定公園のフンクルの感想について

佐藤清明氏

蘭展 1. 彩色蘭花結成道に対する2.3ガムシの
知光性植物とその分布図多に便覧小
図鑑(子書) 小野 芳氏

2. 二化蝶虫の休眠

中塚寛次氏

3. 鳥獣展の天然記念物

佐藤清明氏

(編集部)

それから謝辞を述べれば、もう一言、先月号にS.F氏により「人間のために自然を壊し自然を壊れる人間」と題して真面目な人道的財産が述べられていたのを面白く拝見、私も蛇足ながら一言述べさせて貰おうと思う。

自然というものは一たび破壊され自然として見るように見えて、それでいて成虫場に立つて見ると更に矛盾に満ちたもので、自然は数多くの動物を創り出して置きたがら彼らを冷感極す身たい生存競争場へと送り込んでいる。多くの動物は自己の生命を全うせんがためには他の犠牲を強いねばならぬ犠牲に置かれている。果敢なところで昆虫界をあらつと踏みつけたばかりでもそこに在りて多くの恐るべき産後行鳥が繰返されていくかに思が何く。しかし彼等の行爲を罪惡視するのはあまりに

勝である。若し飯の………時ありとするなら飯もそうう
う境目に置いた自然そのものに責任ありとせねばならぬ。

とこもがだからといってこの儘のことを人間社会に播つて来
て獲人も自己の生存のための必然的な行為であつて罪愆も然に



あるほどといつて貰つては困る。人間には他の動物には見られないもの、人間の
人間たる所以のものがあつた。人間は自己の存在を確保すると共に他の存在をも保
護し、お互いの自由と平等を確保することを知りそれを義務として多くの人が実
行しているのだ。こういった考えは同じく生を度けた生物一種に対して持ちたい
。ところが自然というものは思うようには出来ていない。故にこゝに自然の矛
盾を感じ、人間の犠牲となつた動物は生物一種に対して心から許しを乞ふた
くものである。

岡山博物館全体では去る12月2日観覧客で我々の犠牲となつた生物の貴い命を
想ふための第4回虫供養を行い心から彼らの冥福を祈つた。正月に蒲見の展覧
業者達は貴重な虫を提供するのは本に付して虫供養を行うやうである。先月夏のS.
氏の云葉を記し人間性のあらわれに外ならないと思う。

このような生物に対する透つた理解ある態度が又引いては如何に多くの精神的
物質的利益を人間に与へるかを凡ての人が認めなければならぬ。一旦生物を飼ふ
ことを知つた者は又さつと自分の隣人をそとより多く愛するようになるに違ひな
い。故に私は生物を愛好する人々のこのような態度に尊敬の念で欣快の情を感じ
得ないのである。

第4回虫供養、第39回岡山博物 同好会盛大に挙行さる

去る12月2日初冬の空はくつろりと澄みわたり、肌寒い。午前9時頃 遊給
も先頭に次々と参加者が多数中興者につめかけ、虫供養開会の午前10時半同好



会禮堂には20前後名の参加者が、村岡俊学師を先頭に入
場、続いて同好会長のバス、経緯と進んで「………
あゝ人類の皆さんがために、身を捧げ …………」の所
謂一節がなごそかに場人と「蒼天婦人愛」の位牌の中
からはい出した、ス・ムン、ス・リズリス、フオロス・ス
の連中が、ガサゴリニコロコロを転がして来て、「

今日は焼倉に対して行なつた葬儀にマツて来たんだよ。これでまあなんとかかんにんしてマツておよいではないか。」と云つた調子で行儀よくマツて、いそ中をべつてはにだにだ、ガヤガヤ云つておるかと思うと、アブチゼミ、ヒガラシの戸動のメロディーが流れて来た。云つた感じ聞いているとそれは4人の坊さんのお経だった。続いて焼倉に入り、次々に入り参り立かわり焼倉しては黙禱して自分の所に歸つて行く。

マツて焼倉、焼倉が終つて佐藤同好会長の挨拶があり退散したが、倉敷昆虫同好会のメンバーは青野、中塚、小野と云つた虫屋しの大蔵が、その野をぬぐつてもらひたいと云つた顔は真面目な顔をならべているのが、そわだつて目止つた、約30分位だったか、スズメトラマンのシベツターが、いそがしそうにもまだて、いた。

虫供養はこうして12時頃に散会。時半より開会の記念講演会場大蔵昆虫研究所には12時半頃よりどしどし集つて来たが、大半は倉敷昆虫同好会の常連だった。午後1時半記念講演に先立つて岡山博物同好会第4回学術博物館ツクールの特懇(同懇)について佐藤同好会長の話があり、続いて記念講演に入り30有餘名の聴衆がつかひかけ下記の講演がありその後考古館を見学4時散会した。

- | | |
|-------------------------|-------|
| 1) スズメトラマンの超光体活動とその環境因子 | 小野 洋次 |
| 2) スズメトラマンの休眠 | 中塚 隆次 |
| 3) 倉敷周辺の天竺地蔵 | 佐藤 隆次 |

(N 記)

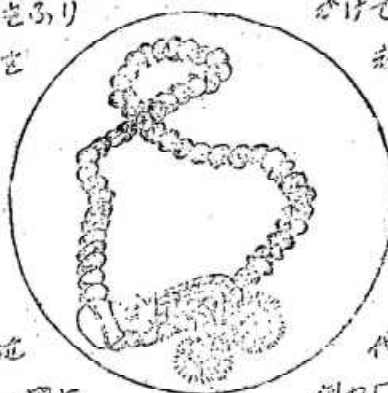
虫供養に参列して

アズファルトの街路から急転してゆるやかな石段を登つて行くとやがて焼倉寺の古めかしい門が見えてくる。その暗い門の右側の柱に、いまだクマツリと白い紙がとめてあつて蓋で太々とさらけかかた遺骨がぶらつてある。「岡山博物同好会主催虫供養」と。どうも中塚氏の会によるものらしい。今日、12月2日は既に新聞にも出ていたが虫供養という全国でもおそろしく極めて稀であつたところの、そして又古くからある行事が行われる日である。そつとも虫供養ではある所で虫供養というものをとり行われたと云ふことなので是非誇らしくないことを知れたいが、とにかく岡山県はよく虫供養を行う所らしい。同好会では今回既に4回を数え岡山の虫屋、いまだ物産が引寄せられて来て茶ど。この虫供養は初め初め人頭が生きたためにあらゆる方法によつて滅亡となつて死なした、幾多生物の

暑い空を廻る鳥に行われるものであつて、然るの如うべき道徳的人間に成るだ必然的行爲である。だから私の葬にいづれも必が好むべき日を選んでおられる者ばかりじゃあない、少くとも他方空気に感得して居て、それぞ敬慕するという罪を犯かした者は皆んなを罰すべきである。ノミ先生の巨大な指でひねり潰し、鋼鉄の如き爪で圧殺した者。或はそのピアとコロモの間に挟めてそれが悲愴に堪へ且極端な條件をおどめ作つて、いふじくをむのすづく、雄大でおもてもある姿の、そしておがたしき獣のコロモジラミとかはう生物を飼育した者、DRT. なども云うおやしき粉もあり

ある。とか変な理屈を

。こゝ、観音寺は、虫のな市街中央の静かな大空を占拠してお守で建物に壁張り共に丹飾室、仏壇室、妙見堂、おのかがその一帯には近頃幾度の修繕しており、門に



かけて残存した者など勿論もうで

おえたりしながら門をくぐり

多い中で庭の奥に有る

公園の隅に位置しており

、庭の奥に池、観音の

建たもので庭には大

樹が数本ある。どうい

代も昔から静寂な園という趣

味の「公園……」と云う看板が

か、つていた。花壇には花などが植えられて、シロクサバエ等の仲間がザーンという舞臺のどかに舞っている。その向うに小さなアサミドロの池に落ちた池、それからその向うは、と目を伸ばすと2.3段建てられた観が並んでいて、緑がけの橋が間を放ち、赤い橋の奥で分岐は「池」に集められてゐる。目を戻し観望するうちに、とてつとて花壇に座し、くるくると忙しく立働いて居られる中庭さんにお目して後退した後、早速着席のように入て能付を始めることになつた。お守のてといふイスなどというものはお守の。庭の上に正座である。観望後はあまりこれを行わないのでどうもなんぼしき。妙見堂で坐っている。果には空気があつて人しげく出入りがある。こちらはまだ閑散としたもので、今日は天気がよく風がなく、ぽかぽかと日が当たつて甚だ具合がよい。やがて異から茶とゼンバイが飯に集つて出て来たのでそれを見込んでおしきくして食卓に座してゐると、観入者があつた。最初に居た者、それから観望は観望がけの観望、お守の居座、お守の居座、それにお守を引いて居る者達と、どうも大して虫などゝ観が短さそうに思ふ。さつとさつとさのノミだどに観えのある人達がもしあれば、すぐに着かされていふ、つて、「虫供養次郎」と「節子」の同国山崎物同好会同好会同好会」の刊行された2枚の紙をおおだして次々

と虫屋の方に御案内する。經いて新聞社の方が3人、それから今更には虫の方向のちの方々がおこしに居る。西門農研所長、岩崎市商工衛生部長、岡山大学農学部農芸学研究室の岸江先生という人達である。次々と約20数人が署名をされて虫屋の方へ入って行かれる。大部要が賑わになつてきて、役付は再び賑わになつた。こゝから見るといつも時刻を知らせる大さな鐘がぶら下つていち堂の壁に人ねくねと板の枝ツブリがたかなかい。そうあの門をくぐる人も居ない様だが、まだ知らない方だと思つて、ようやく佐藤先生の「始めますから」と、声があつて、皆人々ぞろぞろと長音をすざましく、と云つても20人ばかりだが、本堂に入場である。役付をあげるわけにもゆかないので背野代にだけ行つていて、いって紙一人本なども探つた、そはやそうする必要がなくなつたので虫屋を置いて坐つてゐる。どろどろという足音がしたかと思つたら急に新聞社のH記者が来て来られて、「マツてゐるマツてゐる。どうもあのブオーンには不都合でねえ」と云われる。こちらで太して好きの方ではないので「はあ……いやどうせよ」と結ましているが、しかし落えて見ると板のように虫を殺し續けて来て、今日お見えになつてゐる方々の中に並べられてもその殺虫数に於ては決して劣ることなく

バツクナンバー分譲

オゾミ第6号 5.00 千 8.00

第9号 5.00 千 8.00

第10号 5.00 千 8.00

第11号 5.00 千 8.00

補助の昆虫(第1号別冊)

10.00 千 8.00

各号とも在庫僅少。

かなり上位におちつても思われる殺虫師の張本人がこゝに虫屋としていて、お花の先生、お茶の先生が来て読座に座敷してゐるのはどうも不都合せんばんの嫌である。丁度そこへ佐藤先生から役付を頼まれたという女学生の方が来られたのでお茶おまかせして、帰列することにした。其いて行くと都千はかど人皆りくねつて進んだるものようである。途中舞臺の前後茶巾の敷座があつて女教師がチヨークをふるお茶をふる。そこを注目をお茶ながら進めればな

らぬとあつて甚だ都合が悪い。本堂に並ぶと、存る経あのブオーンが聞えて来る。蟬鳴きとちつておごそかに、しがしと、又かに取所われている。背野代が入口のすぐそばに、いつせにないやにおごそかに頼して虫屋してゐるので私もおごそかになつてその側に虫屋した。なんだかこの本堂の暗さが、はや常世のもののうらけられた、果敢的暗闇をかせし出して、中の飾りつけや道具が又おもしろいものである。正面に今朝少し中塚さんにお知らせした私の標本が一輪こちらに飾られてデンとすえられてあつて、虫屋物を代表して誰人に目撃をわてされている。今見るとバツクナンバーのイサキマダサの虫を無し

く目にしみる。前に行って洗濯をする。それからまだ盛んにゴオンゴウーンが
続き、饅頭の庵にやら御仕度の要するに「虫達よ寂らかに」という意味の言葉
があつて、ようやく虫達に休憩が与えられた。佐藤先生の茶湯があつて退場したが、
足音附近の威嚇のにぶり方はかなり強いのものようである。今日御参りの方
の中で、噴霧器をお持ちの方がおられたのでお聞きすると「ねばこれ
で、いづれ虫を殺して、いさし、又鬼子も昆虫が好きで、ある所に訪めて
いたが虫達で死にました。それで今日は虫達を救ひようと思ひ出して湖
山からやつて来ました」とのことであつた。鬼子さんについては前夜まで
ことで、御同情にも大行い。この後湖山で協議茶湯があつたが、それには参加
せずに度村附近を歩かすけ、湖の蓮葉の散りどをばがして昼食をした後、午後
一時半から大塚農芸研究所で開催される記念講演会に参加する為、下山した。空
はよく晴れて小春日和、思わず「山へ」の賞賛がじりじり胸の中を横切り、高藤
が目につく。湖畔に入ってから湖間を危気よく飛びまわっているムササビ
ツミの美しい紫色が目につく。(H.O) (12月4日記)



岡山博物同好会總會に参加して

愚いで毎し12月2日日曜日1日中雨天に見えぬ然り同好会一座は健健奇で虫
供養をすませた後、午後一時半から大塚農芸研究所に於て盛大に行われた。暗針
が12度を示しおると最早秋の夜通りにふたしおちあふ戸が閉者がぞくぞく
と近づいて来た。それは想像にそ反ばぬ秋の虫とその仲間である。しかしながら
「ヘーヘーヘー」と笑う虫仲間が居たのが更に残念。自分は少々遅れて参加した
。自分を出て、ちょっとあたりを窺つたが最早秋の仲間はいなかった。門前の
看板を見ながら大急ぎで歩いた。道の両側にある山樫の木の下を通りながら、夏
ならばこの木に隠れると、に
至るコガネ虫とモガネ虫の
云うものの、この木には夏各
人っている。自分がこゝを通る
く走つたものだ。会場へ行く
沢山の荷が、それはいかに
。自分はいつておんげんで
臍が痛いのを覚えた。そうし



わかにB29とも云うべき夏の
である。今は早12月上旬とは
の变化なくどうどうと五五に
時はいつて木に身を隠れてよ
とまず目についたのは中場
と今回の至朝を物語っていた
こんな所へ来るとさつと心
て自分と座席へ静かに腰をか

うした。イ隆その時佐藤先生が小野洋代の紹介をしていゝを暗だつた。それが終り紹介された小野氏はさつそうと壇上に立つた。それはいつも見られる顔であつたが、その顔の裏には何んとかく大学出らしい陽気な燃え、大自然の大海原にひたひたして、そして「ユーモア」に溢んだいかに虫好きであるかと云う事がうかがわれた。どんな苦難な日でも虫とすれば見のがす事の無い完全なる人。その人が今日はガムシの趨光性について、こつこつと研究発表をした。その要約として中埋藏体の二眼眼虫の体動生理と生殖器官の発育について発表した。その内容たるものは僕にくわしくのめりみづに、そして重要なものであつた。その日の夜の発表は僕らにとって、どれぐらいたいせつであつたか、それは云うまでもなく、だいへん出来たものであつた。引続き佐藤先生が倉敷附近の天然記念物について、いろいろと意味ある説明をくわえそれに天然物の観察まで見せていた。また又天然記念物まわりをするなどと云われ僕らの胸の中にも一つの大きな聲をこしらえてくれた。こうしてとくとくと悦ばれる語に僕らは嬉しさを覚えて聞き入つていた。しらぬまに更刻の多時は並ずき、これから倉敷市西郷へ向かうなり佐藤先生を先とうに数人一同はその後に従つた。そうして倉敷市西郷見守をぶじに見つくし、その後解散に至つてわけである。

(1951.12.18. T.K. 切)

新入會員

会員番号	氏名	住所	所属又は職業
41.	永野弘道		中2生
42.	黒田祐一		



昆虫談話会開催!

下記により昆虫談話会を開催いたします。
 したいと思ひますのでお申し込み下さい。
 1. 日時 1951年12月23日(土)午後1時
 2. 場所 倉敷市立中央図書館

我が倉敷昆虫同好会も、創立以来はや滿1年をまさに迎えるとしている。この間に会としてその組織外溢にかなりの変化があった。会費数もその当時に比べると増えているが喜ばれたことである。これらの中会の中核の1人として華やかに動いてあった白脚昭代の死去されたことは痛く惜しまれるもので、永久に故人の脳裏から消えうせない事であろう。ともかくこうした障害にもくつすることなくすくすくと成長して来た。今又会ではこの前の例会で議決された刊行すること、なつて年同難航の計畫に編集に印刷の支障に、日夜かけずりまわっている。前頁に記したが26日1時からの候結会には是非皆人な集つて楽しく話し合いましょう。

会だより



★編集後記

早いもので、「すずむし」もこれで第12号である。そして本号で第1巻を終えることとなる。途中いろいろのことに悩む、すずむしも実に苦難の道を進んで来たが、そのイバラをさすわけがさわけ、ともかくようやくこの怪境のものにたつた。今人の編集員の奮闘もさることながら、皆様の投稿もものすごく、これは一巻に皆様の奮闘力の賜に外ならない。今月号は特に多く、虫使兼が月初にあつたのでこの記事にうすまり虫使兼第1巻号とまで行かないが、まさにその感がある。

大坂の西村さんから東北の録集地についての正確な情報をいただきました。かつたらずや皆様の御指導になる事と思います。又古厩野さんには御多忙のところを御無理を願つて書いて

いただきました。感謝の外ありません。その他おとしぶみせにぎやかです。見聞記は又面白くなごまかな気持で読むことが出来るでしょう。では皆さん冬来たりなば春迄かういづす。準備をせ方に、右の尹とともにすぐ係出す様にお知らせ(0生)

すずむし 第1巻第12号

昭和26年12月22日 印刷

昭和26年12月23日 発行

編集者 小、野 三洋

印刷 小、野 三洋

発行所 倉敷市新川町

倉敷市小學校理科教室

倉敷昆虫同好会